東南アジア政治の比較研究

川村晃一

●制度を通じた東南アジアの比較分析

アジア経済研究所は、2010～11年度に実施した「東南アジア制度の比較分析」研究会の成果として、中村正志編『東南アジアの比較政治学』（アジ研選書No.30）を2012年に刊行した。この本は、東南アジアの先進5カ国（タイ、インドネシア、フィリピン、マレーシア、シンガポール）における政治制度がいかなる形態をとり、いかに機能しているかを、政治学の分析枠組みを用いながら平易な形で解説したものである。

東南アジア政治に関する概説書は、これまでも数多く出版されてきた。しかし、それらの書籍は、「タイ」、「フィリピン」といった国別の事情を紹介するものであったり、年代順にそれぞれの国々がたどってきた歴史を叙述するものだったりするのがほとんどである。このような構成では、各国の歴史を個別に知りたい読者にはいいが、東南アジア政治のおおまかなイメージをつかみたい読者の要求に応えることはできない。

これに対して、『東南アジアの比較政治学』の目次を見ると、第1章の「政治体制」に始まり、「執政・立法関係」、「司法制度」、「政党」、「選挙」、「社会運動」、「国際制度」といったように、抽象的な概念が並んでいる。そこには国の名前も出てこないし、年代順にも並んでいない。それぞれの章では、政治学の理論を用いながら、制度の変容や差異が各国の歴史の中で、また国家間で、どのような政治の違いを生んだのかが説明されている。同書は、制度を比較しながら理論を使って東南アジアを分析することで、この地域を単純化した形でひとまとめに理解できるように工夫されているのである。

●さらなる東南アジアの比較分析へ

今年度に発足した本研究プロジェクトは、この『東南アジアの比較政治学』の手法を受け継いだうえで、カバーする範囲を広げていこうというものである。東南アジア各国でめざましい経済成長が続いていることもあり、これらの国々の現地情勢に対するニーズは衰えることがない。一方で、高い経済成長にともなう急速な社会変容を経験している東南アジア諸国では、社会に通底する構造的問題が再燃すると同時に、経済社会変容にともなう新しい問題が発生するなど、政治的に対処されなければならない問題も多様化、複雑化している。しかしながら、とくに政治情勢については情報がまだまだ不足しており、現地の歴史的背景や制度的特徴などを踏まえた分析の必要性は高い。

一方で、東南アジアの政治情勢に関する解説は、特定の国の文脈に即してなされすぎるところがある。ある国が直面する問題が他の国ではどのように表出しているのか、過去にはどう対処されたのか、といった比較の視点が提供されないため、政治学で蓄積されてきた知見が東南アジアの分析に十分生かされないまま、それぞれの国に固有の問題として処理される傾向がある。

そこで、本プロジェクトは、現地の事情を踏まえながらも、政治学の理論を活かしつつ地域の国々が直面する政治的・社会的イシューを比較分析し、読者に分かりやすく東南アジアのいまの姿を提示していくことを目指すことにした。取り上げられるイシューは、民主主義、法の支配、軍と政治の関係、地方政治といったガバナンスに関わるもの、エスニシティや宗教、市民社会、ジェンダーといった国家と社会の関係に関わるもの、国際協調と国際紛争、国境を越える人の移動、そして日本・東南アジア関係といった国際関係に関わるものまで幅広くカバーすることを予定している。

これらの問題は、東南アジア以外の地域の国々にも共通するものである。地域固有の要因だけから説明するのではなく、理論的にもこれらの問題を分析することで、域内だけでなく、域外と比較しながらの理解も可能になる。本プロジェクトでは、政治学と地域研究の双方の知見を結びつけることを通じて、現代東南アジアの政治を理解するための視座を分かりやすい形で読者に提供することを目指したい。

（かわむら　こういち／アジア経済研究所　東南アジアⅠ研究グループ）